

2018年3月7日

川成 洋

## 第二次世界大戦期の日西関係

- 1939年9月1日 第二次世界大戦勃発。
- 1941年12月8日 太平洋戦争勃発。  
12日 セラーノ・スニエル外相、日本政府の依頼により、  
スペインがアメリカにおける日本側の利益代表となる  
ことを言明する。
- 1942年1月2日 日本軍、マニラに入城。  
3日 フィリピンに関する軍政を布告。  
4日 新年の晩餐会で、フランコは須磨彌吉郎公使（在任、1941年3月～46年1月）に真珠湾奇襲攻撃の成功を称えて、「私としては、日本の有効で特筆すべき戦略が英米に突然に戦争の恐怖をもたらしたのは素晴らしい出来事でした。これで彼らも、日本精神の何たるかを少しは知るでしょう」と語った。  
21日 フィリピンに関する東條首相の第79回帝国議会で演説。  
26日 バルガス委員長とする「行政委員会」の発足。  
29日 スペイン、アメリカにおける日本人の強制収容所及び  
拘留収容所の訪問と巡回のために「中央保護局」の創設。  
6月 スイスおよびスペイン両政府による日米の民間人の交換。  
7月25日 日本の軍政部を「軍政監部」に改組。  
12月8日 バルガスを総裁とする「カリバリ（新比島奉仕会）」の発足。これは、開戦1周年を記念して発足させた大政翼賛会的な組織。
- 1943年1月14日 大本営政府連絡会議で「フィリピンの独立」を提言。  
4月24日 日系人に関する、スペイン駐在公使須磨彌吉郎宛ての重光外相の電報（1943年4月18日付）が、アメリカ

- 駐在のスペイン大使からアメリカ政府に伝達される。
- 5月31日 東條首相のマニラ訪問とルネタ広場での大集会。
- 6月20日 「カリバリ」に対して独立準備委員会の編成を命じ、大統領予定者ホセ・D・ラウレルを委員長に指名。
- 9月 スイスとスペイン両政府による日米の民間人の交換。
- 10月14日 ラウレルを大統領とする 第二フィリピン共和国の誕生。日本の軍政は終了。日比両国は同盟条約を締結。
- 18日 スペイン・ホルダーナ外相、ウラレル大統領に祝電。「ウラレル事件」と呼ばれる「祝電事件」の勃発。
- 10月29日 フランコ、フィリピン共和国の独立を承認せず、という意図をアメリカに伝達。
- 1944年6月26日 スペイン、タンジールから日本とドイツの特務機関を追放。
- 1945年2月3日 マッカーサ將軍麾下のアメリカ軍、マニラに突入。
- 13日 日本軍、在マニラ・スペイン総領事館を破壊し、館員その他の50余名を殺害。
- 3月14日 スペインの『アリバ』紙に日本軍の残虐行為の記事が掲載。
- 3月22日 スペイン外務省は須磨彌吉郎公使に公文を以って抗議。
- 3月 スペイン政府、日本の利益代表を辞退。
- 3月28日 駐ワシントン・スペイン大使・カルデナスはマドリードのレケリーカ外相に次のような電報を打った。「日本に対する宣戦布告はスペインを国際連合の一国にすることになるかと思えます。それでも現在の状況では我々はもうサンフランシスコ会議に招待されないかもしれないし、まず招待されないでしょう。しかしこのような方策によって、今つくられようとしている国際的組織へ我々が参加することへのロシアの反対をおそらく阻止できるかも知れないと思うのです。というのは、日本に対する戦争でスペインが英米の盟友となるならば、我々は講和会議の席に座る権利を得ることになりましょうし、それ故に上述の組織に参加できるようになると思うのです」
- 4月12日 スペイン、日本政府の抗弁（4月11日）をことごとく一蹴し、日本と国交断絶を公文を以って、須磨公使に通告。

.....

アルカサル・デ・ベラスコ（ファランヘ党急進派）をチーフとする  
「スペイン人諜報組織」である「東」について。

ファランヘ党創設者ホセ・アントニオ・プリモ・デ・リベラが1936年11月アリカンテの刑務所で処刑される。これによって、フランコはファランヘ党党首、セラノは書記長に就任。フランコ側と古参党员マユエル・エディーリャを支持者たちとの内紛（1937年、サラマンカの政変）が勃発する。エディーリャを含む、死刑が宣告された12人の1人。ベラスコは収監されていたパンプロナの監獄で共和国軍側の囚人の大量逃亡を失敗させた褒美として減刑された。監獄から出ると、ベラスコはドイツ情報部で訓練を受け、諜報活度に入った。つまりドイツ情報部長官カナリス提督の部下となった。1940年、ナチズムの信奉者で、ドイツ勝利の暁にはイギリスの王位継承候補者となるとみられていたウィンザー公をポルトガルで暗殺しようとした試みを攪乱した。1941年2月、彼は、ロンドン大使館広報担当官に任命される。ロンドンに到着すると、ベラスコはドイツにおために働くエージェントを捜した。ドイツ空軍による爆撃被害とイギリスの政治状況をベルリンに伝えるための情報網を作るためであった。イギリス外務省はMI5にベラスコの行動を監視せよと伝える。MI5の追跡・尾行が始まった。42年1月、ベラスコのヴィザは切れ、ロンドンでの現職を解かれ、後任をルイス・カルボに任せて、マドリードに戻って来た。マドリードで、ベラスコは日本側に協力する話を持ち掛け、日本側が金を支払うことを了解した。

- ① 前年8月から、すでにベラスコは三浦文夫書記官と知り合っていた。三浦は情報網の実務に携わっていた。勿論金の支払いは三浦が窓口であった。
- ② 日本は情報を得る必要に迫られていた。
- ③ セラーノ・スニエル自らが推薦したからだった。

セラーノから日本にとって非常に有効な情報網の活用を申し出があった。日本は必要機器と経費を受け持ち、スペインはそれ以外のことを受け持つことになった。

1942年1月2日、須磨とベラスコとの初めての昼食会。この時、在ロンドン21人諜報員が集めた資料を須磨に渡したのだった。本来だったら、フランコとセラーノだけしか読めない資料であった。その資料には、「TO」という独自の見出しがついていた。折しも、アメリカにおいて日本独自の諜報網は解体され、アメリカにおけるドイツの情報も脆弱であった。スペイン以外頼れる国は

なかった。スペインはラテンアメリカ地域を橋渡し役として使える力を持っていたし、日本の利益代表となって友好的な政策を維持していた。即刻、ベラスコのもたらした情報を受け容れなければならず、「TO」を「盗」という名を付けたのだった。1月8日、まさに最初の情報を東京に送った日であるが、須磨と三浦は東京の外務省に問い合わせた。二人の頭にあったのは、イギリスからの情報を使うこと、アメリカでセラーノの協力を得て情報機関を構築することであった。ベラスコから来た情報を「東」という文字を当てたのだった。「北」はポルトガル方面からの情報。「南」はマドリード・イタリアからの情報。「西」はイスタンブールからの情報。これによって、情報の発信地が見当付けられた。このような情報を付けられなくなっても、地理に関係した名称がつけられ。たとえば、ポルトガル大使からの機密情報は「富士」として知られていた。「スニエル情報」は、カタカナの「ス」だけであった。

次に、アメリカ大陸とマドリードの間での情報をどのように伝えたか。ベラスコによると、メキシコに送られ、そこから短波でカリブ海に碇泊しているスペイン船に送信され、マドリードに送られた。情報がマドリードに着いてからだが、ベラスコは日本側に情報のコピーを渡すとともに、セラーノにも渡していたようだ。

1942年6月、須磨は何回もセラーノに「TO」情報について問い合わせたものの、セラーノは何もなにもしないとの返事だった。ベラスコが実際にセラーノに渡していなかった。

日本軍の示した数値が正しいとすると、日本は戦費の約0.33%を情報活動に使った。そのうえ、増加する予算のなかでもその率を維持し、あとには、その率を増やしさえした。総額は、1941年と42年の、4200万～4600万から、1億2500万～4億円へと、最後の2年間で10倍に膨れ上がった。

諜報活動の支払いにはほかの方法があった。よく使われたのは、のちの売却を考えて、真珠を送ることであった。真珠はヨーロッパで非常に高い値が付けられた。しばしばミキモト真珠を東京からマドリードに送られる外交袋の中に入れて送られた。この際、ミキモトの写真には一切事情の説明はなかった。